

# JAELE Newsletter

## 上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

July 2009

No. 1

### 創刊にあたって

JAELEN 編集長  
埼玉県立大学 飯島博之

平成2年の夏、フェーン現象で熱風が上越市内を吹き荒れた日が大学院の入試でした。解答している間、暑さをしばし忘れていましたが、解答用紙を埋め終わり、ホッとすると同時に、ワイシャツの下を流れる汗に気づいたことを今も鮮明に覚えています。

平成3年4月の入学時、英語専攻の学生は大学院生のみであり、私たちM1は7名、M2の先輩たちは4名という小規模な集団でした。現在、大学院生だけで40名、学部生も54名いるとのことですから、現在、大学院に在籍する皆様には想像もつかない環境かもしれません。私たち7名の同級生は、6名の現職教員と1名の会社員経験者でしたが、各自の思い、教育現場での経験を語り合い、助け合いつつ貴重な2年間を過ごすことができました。このような経験、思いは多くの上越教育大学大学院修了生に共有されているものと信じています。教育現場に戻り、あわただしい日々のなかにおいても、ふと上越の日々を思い出す瞬間があります。春日山の頂に続く曲がりくねった小道、授業中の恩師の言葉、妙高高原でのスキー、修士論文のテーマ設定での悩み、そして、実験結果に統

計的有意差が出た時の安堵感……。このような思い出をいつまでも大切にしたい、そして、会ったことはなくても、全国に同じ思いの仲間がいることを感じる瞬間を学会員に提供できないかという思いからこのnewsletterの発行を提案させていただきました。上越英語教育学会のホームページ上にこのnewsletterを載せ、全国の修了生の動向、現在の院生を含めた学会員の皆様の近況報告や情報交換ができればと思っています。

構想の具体化について恩師の先生方にご相談したところ、編集長をしてほしいというご依頼がありましたので、当面の間、その役割を果たしたいと思います。現在、年2回のペースで上越英語教育学会ホームページ上での掲載を考えていますが、原稿の執筆など、学会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、創刊号発行に際し、私の対応の遅れがあり、提案から創刊までに長い時間をかけてしまいました。原稿を頂きながら、長い間お待たせしてしまった修了生の皆様に心よりお詫び申し上げます。

今後、皆様のご提案、新企画、エッセイなどがございましたら、いつでもお知らせください(e-mail: francisijima@yahoo.co.jp)。上越英語教育学会通信(JAELEN)が上越英語教育学会の活性化の一助になることを切に願っています。

## 幹と枝葉

東京都立新宿高等学校

飛田 牧弘

「こんなことも教えなくてはならないのか！」職員室で一人の英語教師がぼやいた。隣に座っている私が覗いてみると、それは06年度の早稲田大学法学部の語法問題の一つだった。

4 Choose the one way to complete each of these sentences that would make it grammatically INCORRECT.

2 ( ) the extra training he does in the morning, he wouldn't be able to keep up with his teammates.

A But for    B Except for    C If not for    D Were it not for    E Without

学習指導要領の改正を待つまでもなく、コミュニケーション英語への志向が強まっている昨今、意図を適切に表現するものを選ばせる問題ならともかく、入試という競争試験といえども誤っているものを探し出させる問題には首を傾げたくなる。A・D・Eについては、大学進学希望者が多い高校でよく採用される“文法副教材”の基本事項なので、消去法で残ったBとCで多くの受験生は迷ったことであろう。正解はBである。Cについて『ジーニアス英和辞典第4版』を参照すると、接続詞“if”の成句である“if it were not for”の語法説明の欄に「if not for O のように it were [was] が省略されることもある」と確かに小さく記述されている。このように、大学入試で新たな問題が登場するたびに、もっと教えなくてはならないという呪縛に英語教師は悩まされ(もっとも、悩む生徒を前にして、得意気に説明する教師もいるが)、「入試頻出文法語法問題集」という名を冠したトリビアな択一式のクイズ集がよく売れる。入試における語法・文法問題の配点比率は15%程度にすぎないのに、英語の「受験勉強」ということで、クイズの正解の丸暗記に夢中になっている生徒の姿をよく見かける。新たな発見に、ため息混じりで話す同僚の話聞きながら、「文法偏重」と世間から揶揄される種がまた一つ増えたと私は思った。

それでは、文法などは特に教えなくてもすむものであろうか。言うまでもないが、日本のごく一般的な学校においては、現実的ではないだろう。文法なしの英語教育、それは、まるで自動車教習所に通わずに、車を運転するようなものである。試行錯誤の末に運転できるようになるかもしれないが、基本的な技術やルールが身に付いていないので、いつ運転を誤るか危険極まりない。一昔前から比べると、日常で英語に触れる機会は増えたと思われるが、まだ母国語話者のように英語を習得できる環境とはほど遠いのである。日本という英語のインプットが限られている環境で、英語を効率的に学習し、その結果、意図を正確に理解し、伝達できる使い手になるには、英文法という道具は不可欠な存在だと思われる。文法のことを意識することなく、前から後ろへと英語の語順にしたがって読めることを目指して、スラッシュ付きの英文を読ませるフレーズリーディングによる授業を参観することがあるが、そのトレーニングを積み重ねていくだけで、英語の「白文」が読める

ようになるのだろうか。スラッシュに挟まれるセンスグループは、長い主語の後や不定詞句や関係詞節の前後など、文法的な単位と一致することが多いので、自分でスラッシュを入れて読める自立した読み手になるのには、やはり英文法の知識は必要だと思うのだが。

それでは、どの程度まで英文法の知識を教えたらいいだろうか。一つの提案として、基本的な項目を精選すること、たとえば、英文を読む上で必要性の高い項目を優先して扱ったらどうだろうか。大学入試における読解問題の配点比率は、国公立大で 50%強、私立大で 65%前後と、最もウェイトが大きいことは今も変わらない。しかし、“使えない英語”の元凶の一つと考えられている大学入試にも、“使える英語”に対する社会的な要請を反映してか、変化の兆しが見られる。センター試験をはじめとして、読解問題は長文化の傾向にあり、ベネッセ 08 年度入試分析データによると、読解問題一題あたりの語数は、国公立大・難関私立大ともに、半数近くの問題が 600 語を超えている。これは、英語Ⅱの教科書 1 レッスン分、センター試験第 6 問に匹敵する長さである。一方、使用されている語彙のレベルは易しくなっているので、時間的な制約の中で英語の長文を読み、内容を把握できる情報処理能力が試されているといえる。問題の形式も、定番の英文和訳だけでなく、論理的な思考能力を試すべく、語句の推測、文や語句の補充、文や段落の並べ替え、要約、内容一致、内容説明など多岐にわたる。そこで、日常の授業の中では、速読の練習やパラグラフ構造の把握といったマクロな指導を行う一方で、英文読解の基礎として文法・構文を正確に把握させるミクロな指導も当然のことながら必要である。その指導の過程で日々感じるのは、英語を読む上で頻繁に用いる文法の知識は限られているのでは、ということである。短絡的な印象を与えてしまう可能性があるが、あえて大ざっぱに述べさせていただくと、①主語と述語動詞の把握②名詞部分の把握③形容詞による修飾④副詞による修飾⑤等位接続詞による結びつき、と 5 点に集約されるように思われる。私の授業では、名詞の部分を[ ]、形容詞の部分を( )、副詞の部分を< >と記号付けして板書し、矢印を用いて修飾関係を示している。一例として、08 年度の河合塾第 1 回全統記述模試の下線部和訳問題を図解してみると、

(問題文)

Good manners and the understanding among those of similar background are threatened if not already gone, and so is the atmosphere in which careless remarks that reflect contemporary prejudices can be made without upsetting anyone.

(図解)

[Good manners and the understanding] are threatened

S

V

(among those of similar background)

<if □ not already gone>,

and so is [the atmosphere]

V S

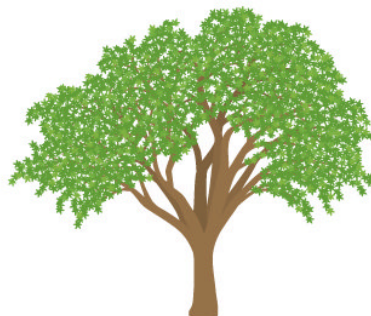
(in which careless remarks can be made)

(that reflect contemporary prejudices)

<without upsetting anyone>.

上記の文では、省略や倒置・代用について説明を加える必要があるが、記号を用いることにより、文の構成がどのようなになっているか、チョークの色を使い分けながら、視覚的に理解できるように努めている。言うまでもなく、受動態・関係詞・前置詞といった、英文を構成するパーツの知識が必要なわけであるが、英語を読むという観点から考えると、とりあえず必要な英文法の知識はもっと絞り込めるのではないだろうか。

高校の現場から“英文法”の教科書が姿を消して久しいが、現在でも3分冊だったころの伝統は根強く残っており、使用頻度が高い項目も低い項目も、ごちゃごちゃに羅列されている副教材が広く使われている。しかし、従来のように英文法を法律の条文のように学ぶのではなく、英語の学習目的に適うように指導項目を精選し、頻度の低い周縁的な知識よりも、頻度の高い中核的なものを優先して指導するという発想が、“英語が使える日本人”の育成のために必要なのではないだろうか。現状では、学習者の目には、木の“幹”も“枝葉”も同じように映っているはずである。



連載 第1回

私の考えていること

苫小牧市立沼ノ端中学校  
校長 佐々木郁夫

私が修了してから丸15年の歳月が流れました。学校へ復帰した2年後の平成7年から北海道教育委員会に勤務し、道内各地を巡りながら多くのことを学びました。たくさんの人と会い、貴重な経験や得難い教訓を得ることができました。縁あって平成16年から苫小牧市内の中学校長として再度学校に戻り、現在2校目に勤務しています。

私が校長として勤務を始めて以来、ずっと考えていることを中心に論を進めていきます。

1 教育活動の成果を子どもの姿で判断すること

どんなに立派できれいな目標や年度の方針、重点を定めても、肝心の子どもが着実に向上していく姿が見えないのでは、無意味に等しいです。校内に入った瞬間、「落ち着いたいい学校」「子どもの表情が明るく爽やか」などの印象を持てる学校でありたいです。長い能書きはいりません。自校の教育活動の成果を子どもの成長する姿を通して、判断してほしいです。教育関係者の目からだけでなく、普通の市民が見ても「なるほど」と納得のいく教育を提供できる学校でありたいです。

2 分かりやすい言葉で説明すること

「確かな学力」「豊かな心」「個に応じた指導」「絶対評価」などの教育用語を使っても、多くの保護者や地域の皆さんには理解されにくい。「人間力」「教育課程の編成」などを持ち出すのは最悪に近い説明でしょう。

おしなべて、学校の先生の話や説明は長くて面白くないという定説があります。特に、校長の話はさらに長くて分かりにくく誰も聞いていない場合があります。思い切って、言うべきことを絞り、簡潔明瞭に話せば、短時間で真意が伝わると考えています。

3 公開をして評価を受けること

これまで学校には都合の悪いことを表に出さないでおこうという傾向がありました。私は、職員に生徒指導上の問題を含めて悪い情報ほど早く教えてくださいとお願いしています。また、学校評価などで保護者から厳しい意見や要望が寄せられ、回答に苦慮することがあります。たとえ少数意見であっても、真摯に受け止め、私たちの考えについて誠意を持って述べるべきです。私は都合の悪いことであっても公開をして評価を受けることが信頼を深めることになると考えています。

4 必要以上に揺れ動かないこと

世の中では構造改革等に伴う格差社会が言われ、教育関連の法律が改正されています。教育は時の社会、政治、経済、外交などの情勢とかかわりを持っています。私たちの立場は難しく微妙になっていきます。子どもたちは変化し続け、親のモンスターペアレント化、理不尽ないちゃもんが毎日のように押し寄せてきます。どんなに世間が変わろうとも、私たちはこれまで通り目の前にいる子どもをしっかりと見て、真剣に取り組んでいくのです。あわてたり揺れ動く必要はないと考えています。

5 明るく未来を信じること

私たちの身の回りには、現状に対するやり場のない不安や不満が渦巻いています。この先見通しは不透明で暗いかもしれません。であれば、なおさらのことニコッと笑って一歩

前へ進みましょう。上を見る必要はないです。上を見たらキリがありません。下を見るのはよしましょう。後がありません。暗い世の中、殺伐とした事件が多いからこそ、みんなで仲良く力を出し合って明るく未来を信じましょう。

以上です。元気を出して

Take it easy.

## ( 苫小牧市教育研究所「教育の広場」2007 . 12 巻頭言より )

今回、寄稿の機会をいただき、大変有り難く、また恐縮しています。かつて教育は聖域の扱いを受けていました。今や世間からかなり厳しい批判的になっているのが学校教育、公教育とってよいかもしれません。私たちには、学校の中から物事を見る傾向があります。ところが世の中は学校の常識や論理を受け入れてはくれません。教育予算の削減に伴い、校舎の改修ができない、学校予算が十分に配分されない現状があります。日増しに規制緩和が進み、地方分権が進んでいます。規制緩和や地方分権が進むと自由度は増加しますが、その分だけ責任が重くなります。説明責任は当たり前、結果責任を果たすのが当然という考え方が主流を占めている現実を見る必要があります。勝ち組と負け組の二極化に伴い、以前まで我が国にあった一億総中流意識は崩壊し、様々な分野で格差が目に見える時代に入っています。

私の持論は「教育改革は学校現場から」です。予算がない、人手が足りない、施設設備が不十分であるとするならば、現有勢力でできることを効率的に行う必要があります。私の勤務する学校は、昨年度 18 学級から今年度は 20 学級になり、特別教室を除いて全ての教室が満杯状態です。この 4 年ほどで急激に増加したため、プレハブ教室を使っても過密し、混雑しています。本校には生徒指導を

含め、困難を極める課題が山積していますが、幸いにも 34 名の教諭、講師、養護教諭、事務職員、事務補、公務補などを合わせると 40 数名の職員が熱意と誠意をもって協力し合い日々の学校運営に取り組んでいます。何かがあれば電話連絡で済まさず、家庭へ出向く。地域からの通報には即座に対応する。勤務時間を超越した親身の指導が生徒と保護者の心を動かします。本校には学級崩壊はありません。問題教師もいません。教育は愛情と信頼が基盤にあります。

今年度は昨年度に引き続き、全職員に学校改善に向けて気持ち(やる気、意欲)を 10% 上げてやりましょうとお願いしました。「昨年とまったく同じことをしない。前年度踏襲を捨て、工夫と改善を加える」「生徒のためになることをどんどんやっていく」「否定語から肯定語へ。ものの考え方を negative から positive へ」「一人で抱え込まない」「生徒指導については、排除の論理を捨て、とことんかわり合いをつくっていく」などを年度の開始に当たって、全体に確認したところです。

世界も日本もたくさんの難しい問題に直面しています。深い霧の中を進む船のように、先を見通すことが難しい時代です。このような逆境の中であれば、なおさら未来へ向かう夢や希望を持てる社会を築きたいものです。その鍵を握るのが教育です。ではありますが、必要以上に気負う必要はなく、あくまでも正攻法で、私たちが元気を出して明るく笑顔で実践を進めていけば、学校は変わり、一人一人の子どもたちはより良く成長し、保護者や地域からの信頼や期待は揺るぎないものになります。そうすることが、学校への理解や支援を得やすくする第一歩につながると考えています。

大学院 1年 言語系コース (英語)  
太田伸子

大学院 言語系コース (英語)  
(免許プログラムコース)  
大川潤子

私は高等学校の現職ですが、実際に生徒に教えていた時には「なぜ、留学生には当たり前のことが日本人の生徒にはできないのだろう。」「英語を読んだり、聞いたりしている時に生徒には何が起きているのだろう。」「自分が作問しているテストは適切なのだろうか。」といった疑問が山のようにあったにも関わらず、なかなか、これらの課題に正面から取り組むことができませんでした。現在は、こういった疑問にしっかり向き合っていけることに幸せを感じています。大学院での勉強は時には大変ではありますが、先生方の熱心なご指導や、他の院生との暖かい交流のお陰で、充実した生活を送っています。さらに、上越市は自然や地理的利便性、歴史的な文化背景にも恵まれ、2年という限られた期間に集中して研究に向かうには最適な場所と言えます。また、言語コース(英語)には様々なバックグラウンドを持った院生が在籍しており、自分自身の視野を広げるという点においても学ぶべき点が多いと感じています。特に、平成23年度からの小学校英語導入に際して、本コースでも小学校教員志望者が増加しており、小・中・高との連携のあり方についても議論され、長期的視野で生徒を指導していくことの必要性に関しても考えさせられています。今までは、小学校や、中学校の教員と率直な意見交換をする機会すらありませんでしたが、現在は自然に、顔を合わせ、交流することができます。こういった人的交流は、現場に戻った際のかけがえのない糧となると実感しており、今後も大切にしていきたいと思っています。

みなさんこんにちは。英語コース英語学専攻、免許プログラムコース3年目の大川潤子です。山形からこちらの世界に転入してきてから、早いものであと残すところ8ヶ月となりました。ここへ来て、本当に月日の経つのを早いなあ、と感じます。これは、ひとえにここでの生活が充実しているからだと思います。今現在は、教員採用試験に必死になっておりますが、この道が開けたのも、こちらへ来たおかげです。先月は、初の中学校での実習を満喫したところです。免許プログラムコースや日々の大学院での学びを、教育の実際の場で試すことができ、本当にすばらしい体験ができました。生徒たちとじかに触れ合う喜びを感じ、教職に対する熱意がまたさらに深まりました。もう最高の3週間でした。

私は、野地美幸先生のゼミで、英語学、特に統語論の勉強をしています。今は、修士論文研究として、英語の第二言語習得の、特にWH疑問文について調べています。論文を読むことで英語力も鍛えられ、また、実験や発表原稿作成を通して研究のノウハウも学んでいます。また、北條先生の小学校英語活動のプログラムに参加して、小学校と幼稚園に、英語活動の出前授業に行っています。こちらは、実践を通してたくさんの学びがあります。プラン作成から反省会までを自分たちで行なうことで、授業案作りの勉強にもなります。このように、実践と研究の両面から、とても有意義な時間を過ごしています。その分、しんどくて泣きたいような日もたくさんありますが、英語コースの仲間たちのおかげで、まだほとんど泣いたことはありません(笑)。

こちらに来て、一番よかったことは、ここでしか出会えない仲間や先生方に出会えたことです。熱心にご指導くださる先生方や、いつも私たちをリードしてくれる現職の先生方に、常に感謝をしながら、これからの私の目標として、もっともっとたくさんのことを学び取りたいと思います。

大変な日々でも、一緒に乗り越えてくれる仲間たちと、120%楽しんでいきます。

## 原稿の募集

JAELEN では皆様の原稿を随時、募集いたしております。テーマは自由ですが、大学院修了後、各地の教育現場でご活躍されている修了生の皆様の近況報告、エッセイ、上越時代の思い出などお寄せいただければと思います。皆様の原稿をお待ちしておりますので、JAELEN 編集部（北條、野地、飯島 e-mail: francisijima@yahoo.co.jp）までご連絡ください。

---

## 編集後記

この度、ここ数年の懸案だった『上越英語教育学会ニューズレター (JAELE Newsletter: JAELEN)』が刊行されることになりました。こうして刊行にこぎつけることができたのは、専ら飯島博之編集長のお力によるものですが、学会事務局の野地美幸先生の支援も忘れることができません。お二人にはこの場を借りて感謝致します。

これから、年 2 回のペースで発行していく予定ですが、会員の皆様にご協力をお願い致します。

上越英語教育学会事務局長  
北條 礼子

---

---

2009 年 7 月 24 日発行

発行者 上越英語教育学会

編集委員 北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）

---

